

特別寄稿

東京外大教授 中嶋 嶺雄

先月下旬以来、中国の最高実力者・鄧小平氏が広東地区の深圳、珠海という二つの経済特区を訪問していることが伝えられ、氏の動静に関心が集まっていた。その鄧小平氏が去る二月三日、上海での春節(旧正月)前夜祭に出席し、一年ぶりに公開の場に姿を現し、北京の中央テレビ局もその模様を報じたとのことである。

政治に民主派存在せず

本年夏には八十八歳にもなる鄧小平氏の一挙手一投足が注目されているのは、彼が公的には引退したにもかかわらず、実際には最高実力者として長老政治の実権を依然として握っているからにほかならない。

だが同時に、このところ中国内政には、改革・開放を推進しようとする、いわゆる改革派と、あくまでも社会主義的原則の重視を強調する、

ただし、ここで確認すべきことは、鄧小平氏といい、陳雲氏といい、彼らはすべて毛沢東政治の犠牲者であったことであり、その点では等しく

揺らぐ鄧氏の支配体制

保革対立、混迷する中国

いわゆる保守派との角逐が熾烈に展開されているからでもある。保守派の重鎮がこれまた鄧小平氏に等しく高齡の陳雲・党中央顧問委員会主任であることも、よく知られている。

旧実権派ないしは旧走資派なのであって、中国政治の非毛沢東化には共にスクラムを組んできた仲間である。それが「四つの現代化」という

運動に理解を示した胡耀邦、趙紫陽といった二人の最高権力者(党総書記)を失墜させたという忌まわしい過去をもつことである。この点で、現段階の中国政治の舞台には、改革派と保守派は存在しても、民主派は存在しないことになる。

そのような中国政治の構図のなかでの当面の角逐だといえようが、そこで深刻な問題は、まさに六・四天安門事件を悲劇的な代償として東欧、旧ソ連、モンゴルにまで波及した脱社会主義、共産党独裁体制解体への歴史の潮流、つまり民主化に向けての全世界的な動きが轟音を立てて流れ出していることである。従って、脱社会主義と



共産党独裁体制解体への潮流にたいしては、改革派も保守派も共に危機感を深めており、いわゆる「和平演変」(中国社会内部分裂からの社会主義体制の平和的変質)には一致して断固対処せざるを得ないのである。

こうしたなかで過般の八中全会では、昨春の全人代で副首相に昇任した前上海市長の朱鎔基・生産弁公室主任、饒家華・国家計画委主任、楊尚昆実弟の楊白冰・中央軍事委秘書長兼軍総政治部主任の政治局入りを鄧小平氏が目論見たが、保守派の抵抗で実現しなかったと一般にいわれている。

【写真】引退したはずの鄧小平氏、また第一線へ江蘇・深圳で遊覧力に二女の鄧楠さんと座る鄧小平氏

人事構想挫折に終わる

想工作担当)や万里・全人代常務委員長、黄菊・上海市長らは「思想解放」を唱えており、きわめて対照的な論調が中国の公式メディアにも目立っている。